

2024 年度科学技術インタープリター養成プログラム修了論文

サイエンスコミュニケーターのキャリア形成  
とメディアとの関わり方

Career Formation of Science Communicators  
and Their Engagement with Media

2025 年 3 月

東京大学大学院 学際情報学府 学際情報学専攻 修士課程

科学技術インタープリター養成プログラム 19 期生

伊藤 映美

副専攻指導教員 佐倉統教授

要旨 .....	5
1 はじめに .....	6
2 方法 .....	7
2.1 対象者の選定 .....	7
2.2 インタビュー方法 .....	8
2.3 分析方法 .....	9
3 結果および考察 .....	9
3.1 黒ラブ教授（お笑い芸人・科学コミュニケーター）のライフストーリー .....	9
3.2 対象者 Z（民間企業に勤務する科学コミュニケーター）のライフストーリー .....	11
3.3 科学コミュニケーターを目指すに至った意識形成や経験 .....	12
3.4 科学コミュニケーターのキャリア形成と仕事の拡大戦略 .....	13
3.5 メディア・情報発信に携わる科学コミュニケーターが直面する課題と解決策 .....	14
4 おわりに .....	16
4.1 結論 .....	16
4.2 著者の変化 .....	17
4.3 限界と展望 .....	17
謝辞 .....	18
文献 .....	18
付録 .....	19
インタープリター養成プログラムを受講して .....	28

## 要旨

本研究は、メディア・情報発信に携わる科学コミュニケーターのキャリア形成の過程を明らかにすることを目的とする。科学コミュニケーターは企業や団体に直接雇用される機会が限られており、多くの科学コミュニケーターは自ら活動の場を開拓しなければならない。本研究では、マスメディアおよびオウンドメディアで活動する2名の科学コミュニケーターを対象に半構造化インタビューを実施し、キャリア形成に影響を与えた要因を考察した。その結果、対象者は、幼少期のメディア体験を通じた科学技術への関心の芽生えや、学習が苦手だった経験、他者に伝えることの楽しさへの気づきが、「科学を分かりやすく、魅力的に伝えたい」という動機の形成につながり、科学コミュニケーターとしての活動へ発展していることが確認された。また、メディアでの継続的な自己発信や人脈の構築、さらに就業場所の多様化といった戦略が、科学コミュニケーターのキャリアの安定につながっていた。加えて、科学コミュニケーターがマスメディアに出演する際は、エンターテインメント性と正確性の両立、ならびに科学コミュニケーターとしてのブランドや専門性の確立が課題となる場合があることが示された。

本研究の知見は、科学コミュニケーターを目指す人々のキャリア選択に関する不安を軽減し、科学コミュニケーター志望者の増加を促すことで、科学コミュニケーション活動のさらなる活性化に寄与することが期待される。

## Abstract

This study aims to clarify the career development process of science communicators engaged in media and information dissemination. Since opportunities for direct employment by companies or organizations are limited, many science communicators must actively create their own career paths by themselves. This study conducted semi-structured interviews with two science communicators working in mass media and owned media to examine factors influencing their career formation.

The findings indicate that the participants developed an interest in science and technology through early media exposure, struggled with traditional learning, and discovered the joy of conveying information to others. These experiences contributed to their motivation to communicate science in an engaging and accessible manner, ultimately leading them to pursue careers as science communicators. Furthermore, continuous self-promotion through media, network-building, and diversification of work environments contributed to career stability. Additionally, challenges such as balancing entertainment value with scientific accuracy and establishing a distinct brand and expertise as science communicators were identified when appearing in mass media.

This study's insights provide guidance for aspiring science communicators, helping to alleviate career-related concerns and promote the growth of science communication activities.

## 1 はじめに

科学技術の発展に伴い、専門的な知識を社会に適切に伝達する「科学コミュニケーター」の役割が求められている。科学コミュニケーターとは、科学的な知識や技術の専門家と一般社会の間をつなぐ職業であり、科学技術の正しい理解を促進し、社会との対話を支援する役割を担う<sup>1</sup>。しかし、科学コミュニケーターという職業の就職先や活動方法は明確に定まっておらず、従事する人は限られているのが現状である<sup>2</sup>。さらに、科学コミュニケーターの社会的価値の確立や、それを支える環境整備も十分ではなく、「科学コミュニケーターとして仕事ができるか」という問いに対しては、「条件付きの YES」と言わざるを得ない状況が続いている<sup>3</sup>。

科学コミュニケーターという職業は歴史が浅く、社会的認知度も低いため、一般的な就職活動のように企業へ直接雇用される機会は限られている。そのため、多くの科学コミュニケーターは自ら仕事を開拓し、活動の場を確保する必要がある。この過程において、メディアを活用した情報発信は、科学コミュニケーターという職業の認知度向上のみならず、個々の科学コミュニケーターの知名度を高め、安定的な仕事の獲得にもつながると考えられる。加えて、本研究の動機の一つとして、筆者自身がメディアを活用しながら情報発信を行う科学コミュニケーターを目指していることが挙げられる。

科学コミュニケーターの活動は多岐にわたり、研究機関、教育機関、企業、メディアなど、さまざまな職業分野と関わりを持つ。本研究では、谷明・澤田・松田・樋江井・隅藏<sup>4</sup>が定義する「メディア・情報発信」の科学コミュニケーターを対象とする。このタイプの科学コミュニケーターは、マスメディアや個人・企業等のオウンドメディアを通じて、情報共有・広報・エンターテインメントを目的に情報発信を行っている。本研究では、こうした科学コミュニケーターがどのように現在の活動に至ったのかに着目し、そのキャリア形成の過程を明らかにすることを目的とする。

具体的には、以下の三点に注目する。第一に、科学コミュニケーターを目指すに至った意識形成の過程を解明することである。幼少期や学生時代の経験が、科学コミュニケーターという職業選択にどのような影響を与えたのかを探る。第二に、メディアや情報発信を活用する科学コミュニケーターのキャリア形成を明らかにすることである。彼らがどのようにして知名度を高め、仕事を獲得し、キャリアを継続してきたのか、そのプロセスを分析する。第三に、メディア・情報発信を行う科学コミュニケーターが直面する課題と、その解決方法について検討する。

科学コミュニケーターに関する研究は未だ少なく、特にキャリア形成に関する研究は限定的である。従来の研究では、科学コミュニケーションの意義や職種の分類に焦点が当てられてきたが、個々の科学コミュニケーターがどのようにキャリアを築き、どのような戦略を取って活動を維持しているのかについての研究は乏しい。本研究の新規性は、科学コミュニケーターの幼少期からキャリア形成に至る人生史に着目し、そのプロセスを明らかにする点にある。また、科学コミュニケーターの活動の中でも特に「メディアを活用した情報発信」に特化して分析を行う点も、独自性として挙げられる。

本研究を通じて、科学コミュニケーターを目指す人々のキャリア選択に関する不安を軽減し、科学コミュニケーター志望者の増加を促すことで、科学コミュニケーション活動のさらなる活性化を目指す。これにより、科学技術に対する市民の理解が深まり、科学技術が適切に社会で活用されることが期待される。

## 2 方法

科学コミュニケーターのキャリア形成とメディアとの関わり方を明らかにするため、メディア・情報発信に携わる現役の科学コミュニケーターへのインタビュー調査を実施した。

### 2.1 対象者の選定

研究対象として、メディア・情報発信に携わる現役の科学コミュニケーター2名を選定した。特に、科学コミュニケーターという職業に対して不安定であるという意識を持ちながらも、長年にわたり活動を継続し、生計を立てている人物を対象とした。一方で、榎太一氏やさかなクン氏のように、科学コミュニケーション活動に加えて芸能界でも広く認知されている著名なタレント的科学コミュニケーターは対象から除外した。本研究では、科学コミュニケーターとしての仕事をどのように開拓し、試行錯誤を経てキャリアを構築してきたのかが明確に示される事例を重視し、多くの科学コミュニケーター志望者にとって参考になりやすい人物を選んだ。

また、キャリアの変遷を理解するために、複数の職種を経験した経歴を持つ者を対象とした。これは、科学コミュニケーターのキャリアパスが多様であり、職業の確立には試行錯誤が伴うためである。さらに、科学コミュニケーション活動の質を担保するために、体系的に科学コミュニケーションを学んでいるかつ、現在も大学と連携して活動を行う者を選定した。加えて、収入の基準として、科学コミュニケーション活動を主たる収入源としている者を対象とした。これは、趣味や副業としてではなく、職業として科学コミュニケーターを選択し、持続的に活動を行っている人物のキャリア形成を分析するためである。

以上の点を考慮し、本研究の対象者として以下の2名を選定した。

#### ① 黒ラブ教授（お笑い芸人・科学コミュニケーター）

1人目の対象者は、主にマスメディアで活動する、吉本興業に所属する科学コミュニケーターであり、お笑い芸人としても活動する「黒ラブ教授」である。彼は、SDGsをテーマにした学びと笑いを融合させたライブや、実験を用いたお笑いライブを実施している。また、大学講師、テレビ・ラジオ等のメディア出演、執筆活動、科学展の企画、科学コミュニケーションのコンサルティングなど、多岐にわたる活動を展開している。科学コミュニケーションに関わる活動を開始したのは2009年であり、現在まで約16年間にわたり継続している。

## ② 対象者 Z (民間企業に勤務する科学コミュニケーター)

2 人目の対象者は、主にオウンドメディアを活用して活動する、民間企業に勤務する科学コミュニケーターである。本研究では、対象者 Z とする。彼は当初、科学館で科学コミュニケーターとしてのキャリアを開始し、その後、民間のディープテックを扱うベンチャー企業に転職し、研究開発部のサイエンスコミュニケーションを担当している。また、科学館時代からマスメディア出演や執筆活動を個人として継続している。科学コミュニケーターとしての活動歴は約 8 年である。

研究の倫理的配慮として、対象者 2 名に対し、事前に研究の目的を説明し、インタビュー実施に関する同意を得た。また、対象者 Z については匿名性を確保するため、企業名や個人名を公表しない。

## 2.2 インタビュー方法

本研究では、半構造化インタビューを実施し、主に意識・キャリア形成、メディアとの関わり方について聞き取りを行った。特に、意識・キャリア形成に関する質問では、ライフストーリー研究のアプローチを採用した。ライフストーリー研究とは、対象者のこれまでの人生や過去の出来事に関する調査的な面接を通じて、その体験に対する意味付けを探ることを目的とする方法論である<sup>5</sup>。具体的には、特定の時間幅を持った体験について尋ね、対象者がどのようにその体験を認識し、解釈しているのかを明らかにする。このアプローチは、時系列的な変遷や変化のプロセスに着目するため、科学コミュニケーターを目指す上での意識形成やキャリア形成のプロセスを時間軸で把握するのに適している。

インタビューでは、転機となった出来事について詳しく語ってもらうことを重視し、最も古い記憶のある時期から、進学や進路決定のタイミング、転職や新規の仕事をはじめたタイミングについて時系列で質問した。特に、人物像や性格、科学技術や勉強に対する意識などについて深掘りを行った。

加えて、メディア・情報発信に携わる科学コミュニケーターとしての活動について、具体的に以下の 8 点を質問した。

- 1 科学コミュニケーターを目指した理由
- 2 科学コミュニケーターとして働くことの良さと困難
- 3 科学コミュニケーターを目指したとき・活動中に感じていた不安
- 4 その困難や不安の克服方法
- 5 これまでのキャリアアップや今後のキャリアアップの展望、最終目標
- 6 情報発信を行う科学コミュニケーターに求められる仕事とは
- 7 仕事を獲得するための生存戦略とは
- 8 メディア関係者と科学コミュニケーターが求めていることの違いで苦労したことと折り合いの付け方

インタビューは2024年に実施し、黒ラブ教授には2回（2024年10月10日に約4時間、11月6日に約1時間）、対象者Zには1回（2024年10月2日に約2時間30分）のインタビューを行った。黒ラブ教授のインタビューは対面で実施し、対象者Zのインタビューはオンラインで実施した。事前に対象者の同意を得た上で録音を行い、データを分析に用いた。

## 2.3 分析方法

インタビューで得られた語りを逐語録に起こし、SCAT（Steps for Coding and Theorization）<sup>6</sup>とナラティブ分析<sup>7</sup>を併用して分析を行った。SCATの、データの逐語録から重要なフレーズを抽出し、その意味を考察、理論化へと展開するプロセスを通じて、科学コミュニケーターとメディアとの関わり方について考察を行った。

ナラティブ分析では、Habermas & Bluck<sup>8</sup>の枠組みに基づき、語りの構造的・一貫性・因果的一貫性・主観的一貫性を整理した。構造的・一貫性に関しては、対象者のキャリアについての語りが時系列に沿って一貫しているかを確認し、転機となる出来事がどのような順序で語られたのかを整理した。その上で、キャリア形成のプロセスを可視化するために年表を作成した。因果的一貫性については、どのような出来事が転機となり、それが後の行動にどのような影響を与えたのかを分析した。主観的一貫性では、対象者の考える「行動の背景や性格」を要約し、行動の動機や性格的特性に基づく一貫性を把握した。

ナラティブ分析の結果をもとに、対象者ごとのキャリア変遷をまとめた年表を作成し、付録に掲載した。本論文では、ナラティブ分析の3つの一貫性のうち、特に時間的一貫性に着目し、科学コミュニケーターのキャリアの流れを明らかにする。また、因果的一貫性や主題的一貫性についても、補足しながら考察を行う。

## 3 結果および考察

本節では、第1項および第2項において、各対象者の語りをもとに作成したライフストーリーを紹介する。続いて、第3項では、科学コミュニケーターを目指すに至った意識形成や経験について分析し、第4項では、メディアや情報発信を活用する科学コミュニケーターのキャリア形成の方法について検討する。さらに、第5項では、メディア・情報発信を行う科学コミュニケーターが直面する課題と、その解決方法について検討する。

### 3.1 黒ラブ教授（お笑い芸人・科学コミュニケーター）のライフストーリー

#### (1) 幼少期から小・中学生時代:科学技術への興味関心

幼少期に『ターミネーター』や『ガンダム』などのSFアニメに夢中になり、ロボット・電気系技術に興味を持つ。しかし、学校の勉強は得意ではなく、自ら「勉強ができない子」と評価していた。小・中学校時代は成績が振るわず、学習に対して苦手意識を持っていたが、それでも知的好奇心は旺盛だった。特に、図書館でNewtonを読むことや

NHK の科学番組を観たりすることは好きだった。また、中学 3 年生頃から、皆を笑わせることが好きだった。

#### (2) 高校進学と芸能活動への挑戦

高校時代、勉強ができないことをからかわれたことをきっかけに、悔しさをバネに学習に励み、勉強が得意になった。特に、授業で NHK の遺伝子に関する番組を観たことが、生物への興味を深める契機となった。

進路選択の際、一般的な進路に疑問を抱いた彼は、演劇の道に進む。しかし、思うような結果を出せず、活動の継続に苦勞した。そこで、親の勧めもあり、大学進学を決意する。

#### (3) 大学時代とお笑い活動

私立大学の工学部に合格し、「ターミネーターの CPU のようなものを作りたい」と考えて電気・電子系の学問を学び始めた。大学入学と同時に、演劇活動を一旦断念し、学業に専念することを選択した。

大学 3 年生の時、中学時代の友人と再会し、M-1 グランプリに挑戦する。その後、M-1 出場の新聞記事をきっかけに、吉本興業からスカウトを受け、大学を休学し、本格的に芸人として活動を開始した。しかし、コンビが解散し、芸人としての活動が難しくなったことで、再び大学に戻ることを決意する。

#### (4) 科学コミュニケーターとしての転機

科学コミュニケーターを目指す契機となったのは、コンビ解散後、一人で漫才をする方法を模索していた時のことだった。大学の授業を振り返り、「興味があるのに、なぜつまらないのか」と疑問を抱いた。そして、当時のスライドを確認したところ、「興味を無くさせる技術が詰まっている」と感じた。

そこで、「笑いの技術を取り入れれば、科学を面白く伝えられるのでは？」と考え、科学漫談のスタイルを開発。最初の 1 年間は 2 分ネタを小さい小屋で、フリーライブ形式で行った。また、研究室の教授にお願いされ大学の非常勤講師になり、生計を立てた。

2 年目になると、「科学界に珍しい芸人がいる」と注目されるようになり、30 分ネタへと拡大した。2012 年には 50～60 名規模の単独ライブを開催し、サイエンスコミュニケーションを扱う会社への自己営業等を通して 300 名規模の実験・お笑いライブへと発展していった。この過程で、「吉本新喜劇風の科学漫談」という新たなスタイルを確立した。この科学漫談の評判が高まり、雑誌の全国販売やライブの成功をきっかけに、依頼が増加する。2012 年には「サイエンスアゴラ賞」を受賞し、更に知名度が向上した。

#### (5) 知名度向上から現在

コロナ禍を契機に、オンラインでの活動を強化した。ポッドキャストや YouTube、ラジオ番組への出演を増やし、特にポッドキャストでは Apple のランキングで上位に入るなど高い評価を得た。このポッドキャストが全国配信されたことをきっかけに、さらにテレビ

やイベントのオファーが増えた。現在、ラジオのレギュラー番組、お笑いライブ、本の執筆、大学での授業、サイエンスコミュニケーションのコンサルティング、テレビ出演、ツアー企画等、活動は多岐にわたる。

### 3.2 対象者 Z（民間企業に勤務する科学コミュニケーター）のライフストーリー

#### (1) 幼少期から小・中学生時代:科学技術への興味

科学技術への興味の入口は宇宙だった。幼稚園の頃に連れて行ってもらったプラネタリウム体験と『ウルトラマン』や『ガンダム』といった宇宙を舞台にしたエンタメ作品が宇宙への興味のきっかけである。これらを通じて「宇宙ってすごい」と感じるようになり、自然と「自分は研究者になるのではないか」と思うようになった。

また、小学生の頃には親に買ってもらったビジュアル中心の図鑑を通じてさらに知的好奇心を刺激され、『NHK スペシャル』などのドキュメンタリー番組を積極的に視聴し、継続して宇宙への興味を持ち続けた。しかし、学校の理科の授業には違和感を抱き、問題を解くよりも科学に関する本を読むことの方が好きだった。

中学受験を経て私立の中高一貫校に進学する。進学校に入ったことで自分と同じレベルの勉強ができる生徒が集まり、それまで「自分は頭が良い」と思っていた彼はあまり勉強に力を入れず、結果的に「落ちこぼれ」になってしまった。それでも宇宙への興味は持続しており、「研究者になりたい」という漠然とした気持ちは変わらなかった。

#### (2) 大学時代

浪人後、宇宙開発に関われると考え、工学部に入学する。しかし、「本当に自分がやりたいのは工学ではなく、本質を知ることができる理学だ」と気づき、理学部へ転部し、宇宙物理の研究を始めた。しかし、宇宙物理の研究を始めると周囲の研究者と比べると自分は研究に対する熱意が低いことに気づく。

また、研究室の輪読会や教授の授業があまりにも難解で、「なぜ研究者は、こんなに面白いことを難しく話すのか？」という疑問を抱くようになった。この違和感が、彼を「研究者」から「科学コミュニケーター」への道へ導くことになった。サークルの文系の友人たちに宇宙の話をする、興味を持って聞いてくれることに気づき、「誰でも理解できるように科学を伝えること」に面白さを感じた。また、バンド活動を通じて「人に何かを伝えることが気持ちよかった」と思ったことも影響している。さらに「面白い世界を研究者だけの間にクローズさせておくのはもったいない」と考えるようになり、メディアを通して科学を伝える仕事に就きたいと考える。

#### (3) 科学コミュニケーターとしての転機:博物館での業務

転職活動時、「メディア業界で働きたい」と考えて求人を探していた中で、偶然、科学館の科学コミュニケーターの募集を発見し、採用された。

科学館では宇宙や AI、ロボットなど幅広いテーマで企画を担当。特に SF やエンタメと科学を融合させたイベントを多く手がけた。科学館での 5 年間で企画・提案力と人脈を

築き、3~4年目頃から自分のブランドが形成され、企画や執筆ができると自信を持てるようになった。メディアで仕事をする飲み友達もでき、個人としての執筆やテレビ出演等活動の幅も広がった。

しかし科学館での活動を続ける中で「科学技術の社会実装を研究者や開発者と最後まで伴奏したい」と考えるようになった。また、マスメディア制作会社への入社を目指していたが、出演者としてメディアに関わる中で「科学コミュニケーションとマスメディアの相性が悪い」ことに気づく。そこで「マスメディアではなくオウンドメディアで科学コミュニケーションを行いたい」と思い、民間企業への転職を決意した。

#### (4) 現在:民間企業で働く科学コミュニケーター

現在は民間企業で研究開発部のサイエンスコミュニケーションを担当し、科学とエンタメを融合させた漫画や小説のプロジェクト、YouTube や SNS を活用した研究開発記事の作成を行っている。

また、科学コミュニケーターとしてのキャリアパスが未整備であることに課題を感じ、副業として産官学連携事業やメディア出演にも積極的に取り組んでいる。

### 3.3 科学コミュニケーターを目指すに至った意識形成や経験

本節では、研究対象である2名のライフストーリーを比較し、メディア・情報発信に携わる科学コミュニケーターを目指すに至った意識形成と経験に共通して見られる要素を整理する。

#### (1) 幼少期のメディア体験を通じた科学技術への関心の芽生え

両者とも、幼少期に SF アニメや科学ドキュメンタリーに触れることで、科学技術への関心を育んでいた。一方で、学校の授業には強い興味を持たず、体系的な学習よりもエンターテインメントを通じた知的好奇心の刺激によって科学に関心を持つようになった。

このことから、幼少期に科学を「楽しむもの」として認識することが、後の科学コミュニケーション活動につながったと考えられる。

#### (2) 学習が苦手だった経験と他者に伝えることの楽しさ

両者は共に、学生時代に勉強が苦手だった経験をしていた。その経験が「学習が苦手な人の気持ちを理解する」ことにつながり、科学を分かりやすく伝える意識の形成に影響を与えた可能性がある。また、両者は共に「人前で何かを伝えることの楽しさ」を強く感じる性格を持っており、科学を単に学ぶだけでなく、他者に伝えることに価値を見出していた。この要素が、科学コミュニケーターとしての適性を高める要因となったと考えられる。

#### (3) 学術への興味と教育の伝達手法への疑問

両者は大学進学後、学術的な内容には関心を持ちながらも、研究者が実施する授業を面白くないと感じる経験をしている。幼少期から科学をエンターテインメントとして楽しんで

いたため、大学の授業が単調で退屈なものに思えた可能性がある。この経験を通じて、「科学は面白いのに、伝え方が適切でないために興味を持ちにくくなる」という問題意識を持つようになったと推測される。

黒ラブ教授は、『科学は頭のいい人がやるものだって思われてるイメージがあるのね。僕の中でそれが1番科学から距離を離す原因になるんじゃないかと思っていて。こんな言い方悪いけど、こんなアホな人でもできるんだ。じゃあ俺でもできるねみたいな。のようなのを目指して。それには不真面目（お笑い要素）が必要なんだよね』と述べている。この発言からも、過去の自身の苦手意識を活かし、誰にでも科学を理解し、楽しめるようになってほしいという思いを持っていることがうかがえる。

本項で示したように、対象者2名がメディア・情報発信に携わる科学コミュニケーターを目指すに至る過程には、①幼少期のメディア体験による科学技術への関心の芽生え、②学習が苦手だった経験と他者に伝えることの楽しさへの気づき、③教育の伝達手法に疑問を抱いた経験、が共通して見られた。これらの要素が相互に影響し合うことで、「科学を分かりやすく、魅力的に伝えたい」という動機が形成され、科学コミュニケーターとしての活動へとつながっていったと考えられる。

### 3.4 科学コミュニケーターのキャリア形成と仕事の拡大戦略

本項では、メディアや情報発信に携わる科学コミュニケーターがどのようにしてキャリアを形成し、仕事の幅を広げていくのかについて論じる。

#### (1) 継続的な自己発信と認知度向上

黒ラブ教授は、科学漫談を継続的に実施し、徐々に公演の持ち時間や観客数を増やしていった。さらに、サイエンスアゴラ賞の受賞や雑誌掲載が契機となり、知名度が向上した。ラジオが全国放送されたことで、積極的な営業をせずとも依頼が来るようになった。このことから、メディアでの継続的な発信が科学コミュニケーターとしての認知度向上と仕事の安定化につながる場合があることが分かった。

#### (2) メディア関係者とのネットワーク構築

対象者Zは、メディア関係者との交流を積極的に行い、飲み会などを通じて仕事の機会を獲得した。この事例から、人脈構築が仕事の安定に寄与する可能性があることが分かる。特に、メディア関係者との信頼関係を築くことで、出演の機会が増え、新たなプロジェクトへの参加にもつながる可能性がある。

#### (3) 就業場所の多様化と専門分野の拡張

黒ラブ教授は、「分かりやすく伝える能力」が評価され、大学教員としての授業を担当することになった。その授業内容には、自身が専門としていなかった工学部2年生向けの電

磁誘導やプラズマの実験などが含まれるが一から学習しながら対応している。このように、専門領域にこだわらず、新たな分野の学習を続ける姿勢が、科学コミュニケーターとしての安定したキャリアの獲得につながると考えられる。

また、大学の一般教養科目や入門レベルの授業は、専門的な研究を行う大学教員の負担を軽減する役割も果たしうる。そのため、科学コミュニケーターがこれらの授業を担当することで、科学コミュニケーターのキャリアの幅を広げると同時に、大学教育にも貢献できる可能性がある。

本項で示したように、①メディアでの継続的な自己発信により、知名度を向上させること②メディア関係者とのネットワークを築き、仕事の機会を広げること③就業場所を多様化し、専門外の分野にも適応できる柔軟な学習姿勢を持つことで、科学コミュニケーターとしてのキャリアの安定と発展が期待できる。

### 3.5 メディア・情報発信に携わる科学コミュニケーターが直面する課題と解決策

本項では、インタビュー対象者の発言をもとに、メディア・情報発信に携わる科学コミュニケーターが活動を行う上で直面する具体的な課題を整理し、彼らがどのように対応しているのかを述べる。

#### (1) マスメディアにおけるエンターテインメント性と正確性の両立

両者は共に、マスメディアにおいて科学技術の情報を正確に伝えることの難しさを指摘すると同時に、メディアの特性に適応することの重要性についても言及している。黒ラブ教授は、「科学はマニアックなものだから、正確に説明しようとする『そんな細かいことはどうでもいい』と言われてしまう」と述べ、一般の視聴者が求める情報のレベルと科学的正確性のバランスを取ることの難しさを語っている。一方、対象者Z氏は「メディアは聞こえの良いキャッチーな部分だけを取り上げたり、断定的な表現を求めたりする傾向があるため、科学の不確実性を伝えることが難しい」と指摘している。

こうした課題に対し、対象者Z氏は「メディアを敵視するのではなく、一緒に仕事ができる人を見つける努力が大切」と述べ、メディアの特性を理解しながら科学の正確性を守る工夫が必要であると考えている。その具体的な方法として、「監修をつけ、情報を丁寧に扱ってくれるメディアと仕事をすることが有効である」と述べており、さらに「メディアが何を目的とし、どの層をターゲットにしているのかを理解し、臨機応変に対応することが求められる」とも指摘している。

また、黒ラブ教授は、必ずしも科学に興味のない層にも情報を届けるために、「都市伝説のような番組にもあえて出演し、科学が苦手な人ともつながることで、科学への興味を持ってもらうことができる。科学コミュニケーターとして外の世界と繋がるべき」との考えを示している。さらに、メディアでの情報の取捨選択について、「ある程度の妥協は必要であり、視聴者が納得し、爽快感を得られる伝え方をしなければならない。リズムやテ

ンポを考慮して情報を伝えることが大切である」と述べ、科学の正確性を追求するだけでなく、興味を持ってもらうことの重要性を強調している。

しかし、黒ラブ教授は、マスメディアでの活動において「台本が決まっていない状態で話すことへの不安」も語っている。ラジオやテレビの出演では、何を聞かれるか分からないため、瞬時に適切な科学的説明を提供することが求められる。そのため、「科学的な正確性を保ちつつ、わかりやすく伝えることは容易ではなく、真実を伝えながら話すのが難しい」と述べている。また、誤った情報が発信された場合の対応についても悩みがあるという。「他の出演者が間違った発言をした際、それを指摘するとその人のキャリアに悪影響を与える可能性があり、指摘をためらうことがある」と述べており、情報の正確性と対人関係のバランスを考慮する難しさについて言及している。

さらに、対象者 Z 氏は、新技術に関する情報発信が社会に与える影響の大きさについても懸念を示している。特に医療や生命科学の分野では、新たな技術や治療法に関する情報が誤解されるリスクがあると指摘する。「例えば、医療系の最新研究で血管生成が可能になったと報道された場合、病気の人々は希望を持つかもしれない。しかし、実際にはマウス実験の段階であり、人間にはまだ適用できない場合もある。それを知らずに期待した人が、後に絶望してしまう可能性がある」と述べ、情報の取り扱いに慎重になる必要性を強調した。また、「テレビやラジオで話すことで、知らないうちに何百人もの人々を傷つけてしまう可能性がある」とも語り、科学コミュニケーターとしての倫理的責任の重さを感じている。

こうした課題を踏まえ、対象者 Z 氏は「科学はもっともらしく見えるものであるが、明日には新しい発見によって覆るかもしれない。その不確実性を意識することが重要である」と述べており、科学コミュニケーターが発言する際には、その情報が持つ不確実性や限界についても意識しながら発信する責任があることを強調している。

## (2) 科学コミュニケーターのブランドと専門性の確立

黒ラブ教授は、科学コミュニケーターがメディアに出演する際、専門家との差別化が必要であると考えている。「黒ラブ教授を作った時に中途半端なコンテンツになりかねないと思った。ニュースでキャスティングするときは専門家呼ぶと思う。専門家にはないプラスの要素や商品価値が必要。(そうでなければ) 適当に説明してくれたらいいというような便利屋のようなのがサイエンスコミュニケーターだと思われかねない。」と述べた。黒ラブ教授は、お笑い要素を交えながら科学技術をわかりやすく伝えることが差別化を図っている。また、今後のキャリアについて「複数の資格を取得し、専門知識を融合させることで、より広い範囲で活動したい」と述べた。一方で、科学コミュニケーターが「何でも知っている存在」と誤解されることへの懸念も示している。それに対し、「わからないことは喋れないって言うが、喋れないと伝えるとそこから話が繋がらなくなる。」と科学コミュニケーターの立ち位置の難しさを指摘している。

対象者 Z 氏は、「科学コミュニケーターという肩書きを使わない方がキャリアパスが広がるのではないか」との考えを示しており、「既存の職業に落とし込んだほうが、仕事の

機会が増えるのではないかと述べている。また、「科学コミュニケーションはセンシティブな分野であり、炎上しやすい」と指摘し、「科学コミュニケーターという言葉の範囲が広すぎるため、より細分化して新しい名称を考えてもいいのではないかと」の意見を述べた。

### (3) 科学コミュニケーター業界の安定性

対象者 Z 氏は、ベンチャー企業の正社員として科学コミュニケーターとしての職に従事しているが、科学コミュニケーション業界全体のキャリアの安定性について不安を抱いている。特に、「3年後、4年後も働き続けられるのか」「給与が上がるのか」といった点について懸念を示している。科学コミュニケーターは、監査役やエンジニアのように確立された職種ではなく、転職の選択肢が限られていると指摘する。仮に転職先が見つかったとしても、待遇が下がる可能性や、任期付きの契約になるリスクがあることを不安視している。

また、現在の勤務先では科学コミュニケーターを雇用した前例がなく、その職務評価の基準が明確に定められていないという。会社側も評価の方法が分からず、「どのように評価すればよいか自分で考えてみて」と指示されたと述べている。

こうした不安に対し、対象者 Z 氏は「僕たちはコミュニケーターなので、相手に合わせて、相手に響くところを反映させて話せばよい」と述べ、コミュニケーションの力を活かすことの重要性を強調している。また、「キャリアパスが確立されていないことは不安ではあるが、自ら世の中に作り出していくことには創意工夫の楽しさがある」とも述べており、科学コミュニケーターの新たな役割を築いていこうとする積極的な姿勢を示している。

本項で示したように、科学コミュニケーターがマスメディアに出演する際には、エンターテインメント性と正確性の両立、ならびに科学コミュニケーターとしてのブランドや専門性の確立が課題となっていた。また、企業に所属している場合でも、科学コミュニケーターとしてのキャリアの安定性に対する不安を抱えながら活動している実態が浮かび上がった。

## 4 おわりに

### 4.1 結論

本研究は、メディア・情報発信に携わる科学コミュニケーターがどのように現在の活動に至ったのかに着目し、そのキャリア形成の過程を明らかにすることを目的とした。マスメディアおよびオウンドメディアで活動する2名の科学コミュニケーターに対し、半構造化インタビューを実施し、キャリア形成に影響を与えた要因を考察した。その結果、以下の3点が主要な知見として得られた。

第一に、幼少期のメディア体験を通じた科学技術への関心の芽生えや、学習が苦手だった経験、他者に伝えることの楽しさへの気づきが、「科学を分かりやすく、魅力的に伝えた

い」という動機の形成につながり、科学コミュニケーターとしての活動へ発展しているパターンが見られた。第二に、メディアでの継続的な自己発信や人脈の構築、さらに就業場の多様化といった戦略が、科学コミュニケーターとしてのキャリアの安定につながる可能性があることが示唆された。第三に、科学コミュニケーターがマスメディアに出演する際、エンターテインメント性と正確性の両立、ならびに科学コミュニケーターとしてのブランドや専門性の確立が課題となる場合があることが示された。

## 4.2 著者の変化

筆者は研究を開始した当初、メディアで情報発信を行うタレント的な科学コミュニケーターを目指していた。マスメディアに出演することの憧れと科学に携わる仕事をしたいという2つの思いがあり、両方の望みを叶えられると考えていたためである。

本研究を通じて、自己発信を地道に続けることで仕事の獲得につながることを理解し、大きな勇気を得た。一方で、科学コミュニケーターという職業は、無所属か否かにかかわらず、安定性に欠ける側面があることも認識した。

また、筆者は当初、メディアでの情報発信が「科学技術の適切な利用を促し、安全な世界を作るための教育やきっかけづくりになる」との考えから、科学コミュニケーターを志していた。しかし、マスメディアの情報発信は必ずしも教育や意識改革を目的とするものではなく、娯楽や話題提供を重視する側面もあることを理解した。そのため、適切な「科学コミュニケーション」を目的とした情報発信を行うためには、まず科学コミュニケーションの技術を身につけ、その後マスメディアでの展開を模索すべきであると考えようになった。

このような考えのもと、筆者は新卒の就職先として日本科学未来館の科学コミュニケーター職員を選択した。今後は、日本科学未来館で来館者との一対一の対話を通じて科学コミュニケーションの基礎を身につけつつ、マスメディアを活用した情報発信のあり方を探求していく予定である。

## 4.3 限界と展望

本研究では、インタビュー対象者が2名に限られるため、得られた知見の一般化には限界がある。また、調査対象をメディアや情報発信に携わる科学コミュニケーターに限定したため、異なる職能を活かして活動する科学コミュニケーターにも同様の結果が当てはまるとは限らない。今後はより多様な事例の分析を行うことで科学コミュニケーターのキャリア形成に関する理解がさらに深まることが期待される。

科学技術が社会に深く浸透する現代において、科学コミュニケーターの需要は今後ますます拡大すると考えられる。しかし、職業としての認知度向上や安定的な就業機会の確保といった課題を克服するには、個々の努力だけでは限界がある。これらの課題に対応するためには、国や企業による科学コミュニケーションの重要性の発信や就業機会の創出、さらに科学コミュニケーター育成機関によるキャリア支援が不可欠である。本研究の事例が、今後の科学コミュニケーション研究およびその実践の発展に寄与することを願っている。

## 謝辞

まず、本研究にご協力いただいた黒ラブ教授および対象者 Z 氏に心より感謝申し上げます。お二人へのインタビューを通じて、科学コミュニケーターという職業を選択することへの漠然とした不安に対し、現実的な課題や解決策を知ることができました。

次に、本研究を指導してくださった佐倉統教授に深く感謝申し上げます。インタビュー分析の経験がなかった私は、どのように進めればよいか分からず、なかなか成果を出せずにいました。しかし、佐倉教授には丁寧にご指導いただき、無事に本論文をまとめることができました。

また、科学技術インタープリター養成プログラムの定松淳先生、内田麻理香先生をはじめ、多くの先生方から貴重な助言をいただきました。私の関心に沿ったアドバイスをいただいたことで、最後まで研究を進めることができました。心より感謝申し上げます。

さらに、インタープリターの同期や佐倉研究室の皆様にも感謝申し上げます。授業やゼミでうまく発表できないこともありましたが、皆様が熱心に耳を傾け、多くのコメントを寄せてくださったおかげで、論文作成の参考とすることができました。皆様と共に学び、多くの視点に気づくことができたことに、改めて感謝いたします。

最後に、論文執筆にあたり、私を支えてくれた家族、科学コミュニケーターという夢を与えてくださった恩師、そして事務手続きなど様々な面でご支援くださった全ての皆様に、心より感謝申し上げます。

## 文献

- 1 文部科学省科学技術社会連携委員会 2019:今後の科学コミュニケーションのあり方について,[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/gijyutu/gijyutu2/092/houkoku/\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/14/1413643\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu2/092/houkoku/_icsFiles/afieldfile/2019/03/14/1413643_1.pdf). 【2025年2月閲覧】
- 2 小林良彦・中世古貴彦 2019:科学技術コミュニケーターに求められる職務及び職能に関する試行調査: JREC-IN Portal に掲載された求人情報を用いた分析,科学技術コミュニケーション,25,3-16.
- 3 小林良彦・本田隆行 2023:科学技術コミュニケーターとして仕事をすることから考える科学技術コミュニケーターの役割,科学技術コミュニケーション, 32,17-27.
- 4 谷明洋・澤田莉沙・松田壮一郎・樋江井哲郎・隅藏康一 2022:科学コミュニケーターの職能とキャリア形成に関する考察,GRIPS Discussion Paper,22-01.
- 5 中尾元 2021:ライフストーリー研究の方法論 認識論 (epistemology) としての人文 × 社会科学の交差点,人文×社会 1,1,125-137.
- 6 大谷尚 2011:SCAT: Steps for Coding and Theorization—明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—,感性工学,10,3,155-160.
- 7 野村晴夫 2005:構造的に一貫性に着目したナラティブ分析: 高齢者の人生転機の語りに基づく方法論的検討,発達心理学研究,16,2,109-121.
- 8 Habermas, T and Bluck, S 2000: Getting a life The emergence of the life story in adolescence ,Psychological Bulletin,126,748-769.

付録

① 黒ラブ教授 年表

	幼稚園	小学校低学年	小学校高学年	中学生	高校
科学技術にまつわる事象		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ロボット系 (ターミネーター・カングタム) のアニメが好き</li> <li>・テレビゲームのCPUに興味がある</li> <li>・ニュートンを見ていた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・飼育係 (本人曰くSCには関係ない)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゲームの性能やハードウェアが好き</li> <li>・NHKの科学ススペシャルを見る</li> <li>・テープやCDの記録方法が気に入る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遺伝子や生物が好きになる</li> <li>・理系よりに</li> <li>・コンピュータークラテに入部</li> <li>・数学も積分等面白いと思う</li> </ul>
勉強に関するエピソード		<ul style="list-style-type: none"> <li>・勉強が苦手</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・勉強は苦手。嫌い</li> <li>・英語もロー文字も書けない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不良が多い学校に入学</li> <li>・勉強を始めて偏差値が70くらいまで上がる</li> <li>・中学生の勉強からやり直し</li> </ul>
その他のエピソード	<ul style="list-style-type: none"> <li>・電車が好き</li> <li>・粘土を食って怒られる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シャープペン芯をコンセントに入れて、ホチキスの芯を合わせて通電させて遊ぶ</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・美術部と焼き物部</li> <li>・文化祭にはまる</li> </ul>	
因果的要因 (各エピソードの転機)					<ul style="list-style-type: none"> <li>・勉強で力にされる</li> </ul>
主観的要因 (性格・考え方等)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・しゃべらない</li> <li>・おとなしい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友人としゃべるようになる</li> <li>・恥ずかしいがり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・恥ずかしいがり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中3頃友人と仲良くなり、皆を笑わせる</li> <li>・恥ずかしいがり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・馬鹿にされたことが悔しいと思</li> <li>う</li> <li>・点数が上がるのが面白い</li> <li>・恥ずかしいがり</li> </ul>

	高校文理選択 (高2)	高校卒業後	高校卒業 2年後	大学入学	大学3年生
科学技術にまつわる事象	<ul style="list-style-type: none"> <li>・理系</li> <li>・物理・生物を選択</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学に進学しない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・工学部を受験</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・工学部へ入学</li> <li>・沢山勉強してたがダメだった</li> <li>・しかし上位の成績</li> <li>・CPUや電気回路が好き</li> <li>・科学番組が超好き</li> </ul>	
勉強に関するエピソード					
その他のエピソード		<ul style="list-style-type: none"> <li>・演劇を始める (お笑い系)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・芸能を諦める</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学生時代の友人とM1グランプリに出場</li> <li>・漫才の司会をやる、友人がボケ</li> </ul>
因果的要因 (各エピソードの転機)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業でNHKの遺伝子の番組を見させてくれた</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・親の勧めを受ける</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パソコンの授業に慣れていないかつ、教授の話がうまくない、面白くない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>→素人なのに面白いと新聞に載る</li> <li>→吉本興業にスカウトされる</li> </ul>
主観的要因 (性格・考え方等)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遺伝子が好きだったから</li> <li>・ロボット系が好き→電気系→物理を選んだ</li> <li>・恥ずかしがり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大人たちが通動している様子が楽しそうじゃないように見えた</li> <li>・恥ずかしがり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ターミネーターのCPUが作りた</li> <li>・恥ずかしがり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・恥ずかしがり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友人との漫才に商品性があると思っ</li> </ul>

	大学 休学 吉本興業のスクール に入学	大学4年生 復学	大学院	大学院2年	非常勤講師
科学技術にまつわる事象		<ul style="list-style-type: none"> <li>・勉強は好き</li> <li>・遺伝子組み換えの研究室に入室</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・同大学の別の遺伝子の研究室に入室</li> <li>・大臣賞を取るようなハイレベルの研究室に入室</li> <li>・LEDを用いた生物の健康診断の研究</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最先端の研究のため、試行錯誤</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・博士をやらずに非常勤講師になる</li> <li>・様々な植物の研究チームのリーダーになる</li> </ul>
勉強に関するエピソード					
その他のエピソード	<ul style="list-style-type: none"> <li>・吉本興行卒業のタイミンクで解散</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・周りの勉強意欲が高くない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生物も機械のようだと思う。機械の方が単純構造。生物の繊細なコンピューターが知りたくなる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教えるのがうまいらしい</li> <li>・他の人をやる気にさせる力があるらしい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いろんな先生に話しかけていて人懐っこい</li> <li>・笑いを入れながら話す</li> <li>・その気にさせるのが好き</li> <li>・距離感が近くなる</li> <li>・親しみやすい</li> <li>・自分が頑張るから周りも刺激されるらしい</li> </ul>
因果的要因 (各エピソードの転機)				<ul style="list-style-type: none"> <li>・先生に研究室に残ってほしいと言われる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教授会に通る</li> <li>・チームリーダーに選任だと言われる</li> </ul>
主観的要因 (性格・考え方等)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学院に行ってみたいと思う</li> <li>・工学部があまり面白くない</li> <li>・遺伝子がやりたくなる</li> <li>・CPUよりも遺伝子が好きになる</li> <li>・ジュロシツクパーン等の映画を見て、DNAが気になるように(昔)</li> </ul>			



	2013年	2014年	2017年	2018年	コロナ禍	2021年	2023年	現在
科学コミュニケーションとしての活動内容	SDGsネタお笑いライブ 同じ技術を用いる		実験ショー ワークショップ を開始	サイエンスゼロのコミュニケーション まひめなこと話すようになる ライブに始める	オンラインで学会 ニコニコ動画や理化学研究所 5.6時間	ライブレギュラー 本イベントに、全国放送 ライブ配信チャンネルで約19.9割	本の執筆 サイエンスコミュニケーションの授業 ライブ出演 科学番組の監修 サイエンスコミュニケーションのコンサール 日本科学振興協会 (NPO) 原簿担当等のツアー企画 科学館の作成 高校生以上が楽しめる科学コンテンツの作成	今のメイン 仕事はコロナ禍に減少したものの アツク傾向
その他のエピソード	・実験ショーは苦手、実験ショーは担当せず、笑いを取る担当 ・SDGsのネタお笑いライブ	・夏に科学博物館の展覧会を受 け、学術的に学ぶ ・本館の1日職員展覧会に参加	・実験ショーで笑わせられるよう に、子供向けのオプナーも受けるよ うに ・SDGsの実験ショーも吉本新喜 劇の形で	・文系の研究を始める	・イベントネットが主催で集まってくる ・授業動画の作成の仕事が増加			・舞台はオプナーがあったらやる
技術の習得								
巨額の費用 (各エピソードの記述)					・ホームページを見て依頼が来る			
主観的意見 (性格・考え等)		・科学コミュニケーションとしてオ プナーを保持しなければなら ないと思う	・科学が子供の生のというイメージ が伝わったため実験ショーはや らなかつたが、依頼が多い ・見るの習慣は思い引き受ける ように					

② 対象者 Z 氏年表

	幼稚園	小学校低学年	小学校高学年	中学生	高校
科学技術にまつわる事象	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ピシエアル多めの図鑑を買ってもらった</li> <li>・宇宙好き</li> <li>・エンタメが好き</li> <li>・ウルトラマンとカンザム → 宇宙が岡山出てきてすごいと思った</li> </ul>	<p>宇宙は相変わらず好き。 トキエムンタリー、NHKスベシヤル 図書館でも宇宙の本を借りて読んでいた</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・NHKスベシヤル・本が好き</li> </ul>	<p>中学受験はした方がいいという話になり私立の中高一貫に進学</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・落ちこぼれた</li> <li>・自分が勉強できるって調子乗ったからそんなに勉強しなかった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・落ちこぼれた</li> <li>・部活を頑張る、勉強をしていない</li> <li>・文系科目の方が得意科目</li> <li>・歴史他の本を読んで、歴史を流れて見てたトキエムンタリーとか。物語として覚える</li> </ul>
勉強に関するエピソード				<p>中学受験はした方がいいという話になり私立の中高一貫に進学</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・落ちこぼれた</li> <li>・自分が勉強できるって調子乗ったからそんなに勉強しなかった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・落ちこぼれた</li> <li>・部活を頑張る、勉強をしていない</li> <li>・文系科目の方が得意科目</li> <li>・歴史他の本を読んで、歴史を流れて見てたトキエムンタリーとか。物語として覚える</li> </ul>
その他のエピソード			<ul style="list-style-type: none"> <li>・理科の授業理解不良に怒られた。小学生高学年は頭良かった中学受験のために先取りをしていたため</li> </ul>	<p>中学から部活の方が楽しくなった りしていた</p>	
因果的要因 (各エピソードの転機)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トラスエモン</li> <li>・アラネタリウムに連れて行ってもらい、面白いと思った</li> </ul>				
主観的要因 (性格・考え方等)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究者なるんだろかなと思って いた</li> </ul>	オタク。アニメとか好き	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究者なるんだろかなとは、もう割と強めに思っていた</li> <li>・田舎の学校教育なんで、良くなかったっていうのもあって、1番びねくれた時期</li> </ul>	研究者になるんだ	

	高校文理選択 (高2)	高校3年	浪人	大学入学	大学2年生 (工学部)
科学技術にまつわる事象	化学は苦手			大学というものに絶望。理学部に行きたかったのに工学部入ってるといふ後者めたさ。滑り止めで入ったことのうしろめたさ。	
勉強に関するエピソード	<ul style="list-style-type: none"> <li>・落ちこぼれた</li> <li>・理系を選択</li> <li>・宇宙が好きだになってというのがずっと離れなかったため。</li> <li>・数学も理科も成績は良くなかった。</li> </ul>		大学選択は、宇宙の研究ができる大学を選択。勉強は好きになれなかった	学部社会デザイン工学科で建築土木系に入学	大学の授業を真面目に出て、サークルも楽しむ <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業が楽しくなかったため授業はいかない</li> <li>・まじめにやっていたので成績が良い</li> </ul>
その他のエピソード	<p>中高中高一貫だが、友達が変わり楽しかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・エンタメ系のメテオアのオタク</li> </ul>			進学校というブランドが邪魔をし周りに馴染めなかった。仮面浪人するぐらいの気持ち	
因果的要因 (各エピソードの転機)				<p><b>バンドサークルに入学</b></p> <p>みんないいやつで話ち面白くて、見下してた気持ちがなくなった。サークルの仲間といえるのが楽しかった。</p>	理学部に転部を検討
主観的要因 (性格・考え方等)	宇宙が好きで宇宙を研究するから、若干解像度が上がった。3つ子の強みみたいな感じで思い続けてた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・わからないことが楽しい。かつ、わかんないまま終わるのが嫌だった。全部知りたい。</li> </ul>		SFに薦られていて、テラフオーミングとかの先こう出たりとかするってことは、工学部とかそういう建築関係でも宇宙に関われると思った。	工学部でも宇宙に携われると思っていたが物理が道具だった。本質が知りたいと思い理学部が良いと思った。





## インタープリター養成プログラムを受講して

まず、本講座を受講するに至った経緯についてお話しします。私が科学コミュニケーターを目指すきっかけとなったのは、小学生の頃訪れた防災学習館での経験でした。そこでは、自然や科学、防災に関するワークショップに毎週参加しており、楽しそうに科学技術を教える先生方の姿に憧れを抱いていました。また、先生方から冗談半分で「将来ここで先生として働いてね」と言われたことが、心に残っていました。そこから、「科学技術を人々に伝える仕事がしたい」と思っていた私が、「科学コミュニケーター」という職業の存在を知ったのは、大学4年生の時であり、インプリを学べる本学に入学しました。

受講前の私は、科学コミュニケーションの本質について深く理解しておらず、「ワークショップやプレゼンテーションを通じて人に楽しんでもらいたい」という気持ちだけでいました。しかし、実際に講義を受けてみると、科学コミュニケーションは理論に基づいた実践が求められることを知り、自分の考えがいかにか表層的だったかを痛感しました。特に、講義で扱われる歴史や哲学的な内容に対して苦手意識があり、理解が追いつかないことが多くありました。同期の皆さんが積極的に意見を述べる姿を見て、「なぜこんなに自分の考えを持てるのだろうか」と感心すると同時に、自分とのギャップに戸惑いました。

それでも、発言の機会を与えていただいたことや、コメントシートの提出を通じて、少しずつ自分の考えを言語化する力が身についてきたと感じています。苦手意識からコメントシートを提出できず、ご迷惑をおかけすることもありましたが、個別にミーティングの機会を設けていただくなど、手厚いサポートを受けながら学びを深めることができました。そのおかげで無事に講座を修了し、自身の力を伸ばすことができたことに、心から感謝しています。この経験を通じて、時間がかかっても苦手なことに向き合い、それを温かく支えながら成長を促すことができる人材を目指したいと考えるようになりました。また、本プログラムを受講していなければ、私はおそらく誤った科学コミュニケーションを行っていたでしょう。理論をしっかりと学ぶ機会を得られたことは、今後のキャリアにとって非常に有益であったと実感しています。

修了研究では、インタビューのまとめ方や文系的な発表方法が分からず、思考が停止してしまうことが多々ありました。これは、おそらく文系の方が理系の研究を見たときに理解が難しいと感じるのと同じ現象なのだと思います。この経験を通じて、「異分野を理解すること＝コミュニケーションである」と実感し、自分自身が理系から文系への橋を渡ったのだと考えています。この気づきは、今後、多様な分野の研究を理解し、市民に橋渡しをする科学コミュニケーターの役割を担う上で、大きな糧となるでしょう。

この1年半は、私にとって苦手なことや未経験のことに数多く挑戦する機会となりました。その過程で大変なことも多かったですが、苦手に向き合うことで、自分自身が確実に成長できたと感じています。科学コミュニケーターとしてのキャリアを築く中で、多くの困難に直面することは避けられません。しかし、そんな時こそ原点に立ち返り、これまで積み重ねた1年半のノートや本論文を読み返し、「科学コミュニケーションとは何か」「自分はどのような力を身につけたのか」を改めて考えることで、強みを生かしたキャリア選択をしていきたいと思っています。